

\* これは実際の試験問題ではありません。  
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

人 文 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. 問題数が少ないので 1 問のウエイトが大きい。
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 40 の問い(1-40)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があつてから正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書きいれないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

## I. 名前とは

俗に「名は体をあらわす」ということがよく言われるが、人は名前を付けるとき、何を思うのだろうか。飼いはじめたペットに名前を付ける。あるいは自分の描いた絵に題を与える。はたまた、自分自身に雅号や筆名を付けてみる。そして、生まれてきた子供に名を付ける。こうした場面のそれぞれにおいて名と体にはどのような関係があるのだろうか。また一般に、付けられた名前を思い浮かべると、「アサヒ・イヴニング・ニュース」という新聞、「悪魔」と名づけられそうになった子供、ブリック(=煉瓦)と取り違えられて「ブリキ」と呼ばれるようになった鉄板、アメリカの原住民なのにインド人と呼ばれる「インディアン」、などなど、名と体とが全くそぐわない例は枚挙にいとまがない。そもそも名前とは何なのだろうか。言い換えれば、「名前」と「名づけられるもの」とはどのような関係にあるのだろうか。

ウィリアム・シェイクスピアの初期の悲劇の代表作『ロミオとジュリエット』には、バルコニーで恋人の名前について思いめぐらすジュリエットの有名な台詞「ロミオ様、ロミオ様、なぜあなたはロミオなの」がある。原文で引用してみよう。

O Romeo, Romeo, wherefore(=why) art (=are) thou (=you) Romeo?  
Deny thy(=your) father and reuse thy name.  
Or if thou wilt(will) not, be but sworn my love  
And I'll no longer be a Capulet.

-----

'Tis (=It is) but thy name that is my enemy:  
Thou art thyself(=yourself), though not a Montague.  
What's Montague? It is nor hand nor foot  
Nor arm nor face nor any other part  
Belonging to a man. O be some other name.  
What's in a name? That which we call a rose  
By any other word would smell as sweet.

Act II, Sc. ii, 33-44

素性を知らないまま仮面舞路会で出会った相手と突然の恋に落ちたジュリエットは、その相手ロミオが彼女の家系キャブレット家にとっての宿敵、モンタギュー家の人間であることを知る。愛する恋人と、宿敵であることを示すその人の名。この二つは水と火のように共存できる存在ではなかった。ここから猛烈な速度で破滅にいたる二人の悲劇の最初の萌芽が、「名前には何があるの」というジュリエットの呟きに表われている。彼女が不条理

と感じているように、名と名づけられるものとの関係は恣意的である。しかし、恣意的であっても人はその名前に決定的に支配される。この事実はジュリエットの例を出すまでもなく、われわれを取り巻く有名ブランド商品のことを考えてみれば、商品そのものの価値よりも、ブランド名が人々の求めるものになっている事実にも示されている。ここでも問題は体であるより名である。

それでは、名前を付けるとき、名前と事物とはどのような関係にあるのだろうか。丸山圭三郎は、メルロ・ポンティが、「事物の命名は認識のあとになってもたらされるのではなくて、それは(A)そのものである」と言っていることに注目して、次のように述べている。

私たちはともすれば、言語以前に何かを明確に認識して、それからその認識した対象に名前を付ける、というふうに思いがちである。しかし幼児にとって <対象物> というものは、それが名前をもったときにはじめて知られ、<存在する> ののである。そうしてみると、名というものはむしろ事物の本質であって、事物そのものが名とともに始めて分節され、存在を開始すると言えないだろうか。名づけとは、言語による世界の一つの解釈であり、<差異化 différenciation (仏)> である。そして世界が差異化されると同時に、身体的固体の意識の方も同様に差異化される相互作用を見逃してはなるまい。

つまり、名前がはじめにあって、それが物事に付けられた時はじめて、物事はその本質を持ち意味を持つ、というのだ。名があってこそはじめて体ができあがる。やみくもに土を掘り起こしている人が、山吹色に光る重たい物体を掘り起こしたとしても、その人が金とは何かをあらかじめ知っていなければ、自分の掘り起こした物体を見て、「金だ」と叫ぶことはなく、その本質や意味や価値が生ずることはない。

## II . 名づける

では、人がある事物に名前を与え、その名前と呼ぶという行為にはどのような意味合いが含まれているのだろうか。丸山圭三郎は「名づける」という行為を大きく二つに分類し、次のように述べている。「名づけ」には、「それまで存在しなかった対象を生み出す根源的作用と、すでに存在している事物や概念にラベルを貼る二次的作用の、二つがあると行ってよい。」

こうした名づけにおける二つの状況を思い描くには、旧約聖書『創世記』がよい例を示している。そこには、神が言葉によって世界を創造し、その創造の最後にアダムを土から創ったと記されている。そして、アダムは神が創造した被造物に名前を付けるのである。その箇所から部分的抜粋を現代語訳で引用してみよう。創世記の第一章からの抜粋である。

神は「光あれ」と言われた。すると光があった。神はその光を見て、良しとされた。神はその光りとやみとを分けられた。神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕となり、また朝となった、第一日である。

神はまた言われた、「水の間におおぞらがあって、水と水とを分けよ」。そのようになった。神はおおぞらを造って、おおぞらの下の水とおおぞらの上の水とを分けられた。神はそのおおぞらを天と名づけられた。夕となり、また朝となった。第二日である。(創世記 1 : 3 ~ 8)

全体で六日間を要した天地創造が完成すると、次に第二章では人が創られる。

主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった。主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた。<中略> また一つの川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから別れて四つの川となった。<中略> そして主なる神は、野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名を付けるかを見られた。

人がすべての生き物に与える名は、その名となるのであった。それで人は、すべての家畜、空の鳥と、野のすべての獣とに名を付けたが、人にはふさわしい助け手がみつからなかった。(創世記 2 : 7 ~ 20)

このように『創世記』は神が創造を行なう時に用いた言葉と、人間アダムがはじめて遭遇したものに名を付けた経験を描いている。そして、そのように人は自分の周りを取り巻くすべてのものに名前を付けてきた。その結果、人を囲む空間は名前で満たされ、名前と名前の間に隙間はない。もし、そこに人がそれまで遭遇したことのないものが出現し、その得体の知れない事態をどのように名づけてよいか分からないとき、人はパニックに陥る。たとえば、得体の知れない病に侵された場合、それがたとえ不治の病であっても、病名が与えられればある種の納得を得ることができるが、そうでない場合には、全くの恐怖にとりつかれてしまう。名前を付けることは、解釈を与えることであり、それによって支配を可能とすることであり、欲望を実現することにもなる。それゆえに、名づけ得ないものがあれば、それは人のコントロールの外側に置かれ、人間にとって底知れぬ恐怖を与える。

では、人はその時まで経験したことのないものに遭遇した場合どう名づけているのだろうか。人類にとって未経験なことがらを名づけることは容易でない。前代未聞とか歴史始まって以来といった表現があるが、実際、全く新しい経験や事物に遭遇したとき、それを名づけるには新しい言葉を創りあげなければならない。それが見つからなければ、「未確認物体」とか「テラ・インコグニータ(未確認領域)」とでも言うしかなく、さもなければ経験上の過去の名前をもとに新たに名づけざるをえない。それまで蓄積されていた記憶をた

よりに、なんとかして名前を与えるのである。言い換えれば、人は経験していないことに遭遇すると名を付けずにはいられないが、それは常に経験的知識にもとづかざるをえないのだ。ところが、幼い子供が言葉を獲得していく段階を観察してみると、幼児は先立つ経験がきわめて乏しいにもかかわらず、他者から与えられた少ない語彙を駆使して、大人以上の想像力を発揮しながら自分を取り巻く世界に名前を与えていくと考えられる。その時子供はどのように想像力を働かせているのだろうか。

この問題は幼児期における言語習得という興味深い学問領域を展開させることになるが、それはなにも幼児期にかぎられたことではない。一般に、言語的想像力には、先に丸山が分類したように、二つの区別があると考えられる。彼は、命名行為を分類して、次のように述べている。「命名行為は、＜中略＞二つの全く次元を異にする作用をもっている。一次的には、それまで分節されなかったマグマのごとき生体験に区切りをいれてこれを観念なり事物なりとして存在せしめる根源的作用であり、二次的にはそのようにして創られた存在者にラベルを貼る作用である。」このことをさらに「具体的にいえば、日本語を母国語とする人びとにとって「犬」と「狸」は別の動物であるかのような意識を生みださせるもとなつた命名行為（＝世界の分節）が前者であるとすれば、うまれた犬に「ポチ」と名づける命名行為（＝固有名詞の貼付）は後者であるということになる。」

ここで二つに区別された命名行為に、メキシコの歴史学者エドムンド・オゴルマン（1906～1995）の分類をあてはめれば、「発明」と「発見」という二つの概念で置き換えることもできる。すなわち、「発明」とは、遭遇したものに、それまでの概念をあてはめることができずに、その場であらたな名前を創りあげることである。一方、「発見」とはある事柄がすでに概念として頭の中に存在し、それと同じものに遭遇して、その概念と同様のものを見つけたことである。

### III . 名づけられないもの、または、白鯨の白さ

ところで、もし、何ものかを名づけようとしても、それに適当な名前が思い浮かばない場合はどうなるのだろうか。旧約聖書『列王記』にはのろわれた偶像崇拝者で暴君のアハブ王が、また『創世記』には追放された孤独な異邦人イシュマエルが描かれている。それらの名前をもったアメリカ人によって繰り広げられる世界が、19世紀アメリカ小説を代表する『白鯨』という作品である。原題の『モウビー・ディック』は、ある特定の巨大な白い鯨に付けられた名前であるが、この小説は捕鯨という作業を中心においたことだけでも当時の小説として全くの型破りであった。さらに、一頭の巨大な白鯨と、それに対して激しい復讐心を抱くエイハブ（アハブの英語読み）船長の物語は、スケールも展開の仕方も当時の一般読者の想像力を超えた小説であり、その荒唐無稽さゆえに出版されてもなかなか受け入れられなかった。この小説のナレーターがイシュマエルであり、彼自身がエイハブ船長の復讐劇にまきこまれながら一部始終を語るのだ。エイハブ船長はニューイングラ

ンドの捕鯨基地ニューベッドフォードをクリスマスの日に出航し、多くの乗組員をマインドコントロールしながら、広大な大洋のはてに悠々と泳ぐたった一頭の白鯨を追い求める。ナンタケット島から大西洋を南下して東に横切り、アフリカ大陸最南端の喜望峰を通過してインド洋をさらに東に横断し、フィリピン沖からバシー海峡を横切って太平洋に突入する。まきに地球を股にかけたとてつもなく長い復讐の航海である。

そして、出航以来ほぼ三ヶ月、イースターの日には日本近海の小笠原諸島の南の海域でついにモウビー・ディックに遭遇する。ここで日本がこの小説に登場するのはやや唐突な印象を与えるかもしれない。しかし、この小説全体には日本についての言及箇所が十数ヶ所もあり、なかでも第 24 章にある「もしあの二重に閉鎖された国、日本が、外人を迎えることがありとすれば、その功績を負わしめられるべきものもまた、捕鯨船のほかにはない。それは今日すでにかの国の扉口に近づいてすらいののだ」という箇所は注目に値する。なぜなら、この小説が出版されたのち二年ほどで、あたかもこの予言を実現したかのように、ペリー提督率いる「黒船」艦隊がアメリカ捕鯨船の補給基地の開港を求めて浦賀に来航するのだ。

さて、ようやく発見したこの白い鯨との死闘はその後三日間におよぶ。結局、エイハブ船長は自分の復讐を貫徹するどころか逆にあっけなくモウビー・ディックによって海に引き込まれ、捕鯨船自体も体当たりを受けて沈没。彼自身を含めた乗組員全員が海の藻くずと消えてしまう。しかし、ただ一人生存した男イシュマエルがいて、彼が語り手となつてことの一部始終を物語るのである。

全体で 135 章におよぶ長篇小説であるが、その第 42 章には、「白鯨の白さについて」と題された章があり、白のもつ意味合いがさまざまに論じられている。白という色はいったい何を象徴しているのか。白そのものには無垢や清純などの肯定的意味と、悪意とか憎悪といった否定的なものがあるが、イシュマエルはさらに思索を深めて白色のもつ意味合いについて根源的な瞑想をはじめ。彼にとっては、白という色そのものが問題なのだ。「何よりもわたしを慄えあがらせたことは、それは、その鯨が白いということだった」と、イシュマエルは白という色に底知れぬ恐怖を感じている。その理由を次のように述べている。

それともまた、その本質において白は色ではなくして色の無いことを見た状態、しかも同時にあらゆる色の凝集したものであるがゆえに、こうした理由によって、広びろとした雪景色には、かくも闐寂たる、しかも意味にみちた空白が - 無色にして全色な無神の思想が - あって、それがわれらをして心萎えしめるのだろうか？ またわれわれが自然学の他の学説を顧みるならば、他のあらゆる地上の色彩は、< 中略 > 落日の空や森のうるわしい彩りも、ああ、そのほかの、金泥を塗ったピロウドの蝶の羽根も、蝶のような乙女らの頬も、これらすべては微妙な欺瞞にすぎず、その物自身に内在するものではなく、ただ外面から与えられたものにほかならない。< 中略 > さらに論を進め、この自然のありとあらゆる色調を造り出すその神秘的な化

粧料、すなわち大原動力としての光線なるものは、それ自体では、つねに白または無色であり、もし何か媒介物なしに物質にはたらきかけるとすれば、たといチューリップであれ薔薇であれ、ことごとくただおのれの空白の色に染めるばかりだ。

イシュマエルから見れば、エイハブ船長は白鯨を彼自身の復讐の対象としているのに付して、ナレーターの彼には、物事には意味が内在されているのではなく、見る者が自分の意味を投射しているに過ぎないということになる。つまり、鯨の白さそのものに特定の意味はなく、なにものかを象徴しているのではない。いわば鏡のように、それに投射された意味を反射しているに過ぎない、と言うのだ。つまり、見る者が自分からある意味を白さに投射し、そこからの反射を見て、その意味にとらわれている、とも言い換えることができよう。その意味でこの場合の白さは鏡と同じ働きをしている。となれば水面も同様である。ギリシャ神話にあるナルシスの物語は、ナルシストという言葉の起源となっているが、彼は自分の水に映る姿に憧れ、それをかき抱こうとして恋しさのあまり、水に落ち溺れ死んでしまう。そして、水仙（ナルシソス）という花となった、というのだ。実際に『モウビー・ディック』においても、その第一章でナルシスについて触れて、次のように記されている。

さらにまた、あのナルシスの物語 - 泉のなかに見た己がやさしい姿に悩まされ、それを手づかみにできぬとて、泉のなかへ跳びこみ、ついに溺れたという若者の神話には、もっと深い意味がある。しかもそれと同じ姿を、わたしたちはあらゆる河や海のなかに見る。それは捉えようとして捉えられぬ生の幻妖（あやかし）のすがただ。そしてこれが生のすべてを解く鍵なのだ。

#### IV . コロンブスの「アメリカ発見」

イシュマエルは白い鯨について、なんとか白さに名前を付けてその意味を把握しようとしたが、フィクションではなく現実の世界において、それまで遭遇したことのないものに出会ったとき、人はどう名づけようとしたのだろうか。この問題を世界史の教科書などで使われている 1492 年 10 月 12 日のコロンブスによる「アメリカ発見」という歴史的イベントを取り上げて考えてみたい。アメリカ発見という概念を検討し直してみたいのである。言い換えれば、なぜ、だれにとって、どのようにアメリカが発見され、アメリカと名づけられたのだろうか、と問い直すこともできる。というのは、コロンブスの実体験をたどってみれば、インドをめざし、さらにマルコ・ポーロの書いていたジパング（日本）を夢見て、スペインのパロス港を出発した彼は、従来の東回りではなく西に向って大西洋横断の航路をとり、二ヶ月十日後に待望の陸地を発見する。しかし彼が実際に到着しているのは北アメリカ大陸本土ではない。それなのになぜコロンブスはアメリカと深い関係を持つのだろう

うか。ことにアメリカ合衆国はコロンブスに特別な思いを抱いてきた。10月の第二月曜日はコロンブス・デイで国民祝日である。その他、コロンビア大学、「ディストリクト・オヴ・コロンビア」と呼ばれるワシントンD.C.(特別行政区)、オハイオ州コロンバス市、それにコロンブスのアメリカ大陸発見四百年を祝ったシカゴでの「コロンビアン万国博覧会」(1893年開催)など、コロンブスとアメリカ合衆国との関係は深い。

ところが、起源であるはずのコロンブスの航海に、アメリカは全く登場してこない。合計四回におよぶコロンブスの航海によって、彼が到着した地域を順にあげると、第一回は現在のバハマ諸島に到着し、それをサン＝サルヴァドール(聖救世主)と名づけ、そのあとキューバ・エスパニョラ島の沿岸を航海して帰国し、イザベラ女王宛の報告書を作成している。が、そこにはアメリカという言葉はどこにも見当たらない。それも当然であって、アメリカという名前は、コロンブスの大航海ののちに、「新世界」の存在を示したフィレンツェ出身のイタリア人アメリゴ・ヴェスプッチにちなんで1507年になってから付けられたのである。コロンブス本人は、あくまで自分が到着したのはインドであると信じ、そこに居た原住民にあたかもアダムがしたように名前を与えたのだ。彼はその原住民をスペイン語でインディオと呼んだのである。以来、彼らはアメリカ人とは呼ばれずに、インド人、つまり英語ではインディアンと呼ばれることになってしまった。言うなれば、アメリカというレッテルはまだ無かったのである。もっとも、彼がインドと思い込んでいる地域は現在のインドとは大違いで、現インドの東に広がる、日本(ジパング)を含めたアジア地域全体がインディアスという複数形で呼ばれていた。いずれにせよ、コロンブスの意識の中には自分がアメリカ大陸を発見したという意識は全くなかったのだ。というより、それはありうるはずもなかった。彼は、インドという概念をあてはめ、そのレッテルを貼る意識で自分の経験を名づけようとしていた、と言えよう。

第一回の航海から帰国した彼はバルセロナの宮廷で開催された盛大な歓迎式典に招待されたが、その時、あの『コロンブスの卵』として知られている事件がおきたとされている。当時、すでに地球が球体であることは広く受け入れられており、西に航海を続ければ陸地に到るのは当然のことだと彼の航海を批判する者がいた。それに対して、卵を立てることができるかと訴えたコロンブスは、当惑して静まりかえる人々を前に、それを軽くテーブルにたたいて立たせたのだ。信憑性はともかく、この逸話には、コロンブスは誰も考え付かないことを考え実践した、発想の冒険者だという意味が込められている。その後、1493年には17艘、1,500人を引き連れ、三年間におよぶ探索の末、キューバ島がアジア大陸に属しているかどうかを見極めようとした第二回目の航海、1498年には、トリニダード島から南アメリカ大陸に接近した二年間におよぶ第三回、そして1502年から最後の第四回は一年間ほど現在の中央アメリカにあたるニカラグア、コスタリカ等の沿岸航海を行なっている。その間、彼は最後まで、自分の到着した土地はアジア大陸のインドと思い込み、その信念をますます強固にしている。このうち第三回目の航海に関しては、とくに宗教的な思い込みをしている。すなわち、現在のオリノコ川がパリア湾に流れ込んでいる海域に到っ

たコロンブスは、海水が淡水であることに驚き、それを根拠にアダムとイヴが追放された地上の楽園から流れ出ている四つの川のひとつであると考えた。そして、「地上の楽園」を発見したのだという確信をひたすら深めている。(B) 発想の冒険者コロンブスは旧約聖書のアダムとイヴの楽園という旧来のレッテルを貼ったのである。

それでは、どうして、コロンブスによるアメリカ発見という概念が生まれ、当然のように受け入れられているのだろうか。結論から言えば、後から創りあげられたアメリカという概念が、時代を(C)してコロンブスの行為に投射されたからである。この点について、オゴルマンは次のように述べている。

コロンブスが生活し活動していた世界では、アメリカは予見されていなかったし、予見することもできなかったのであり、せいぜいのところ可能性の一つにすぎず、しかも、コロンブスであれ他の誰であれアメリカが存在し得るとは着想もしなかったし、着想することもできなかった。<中略>コロンブスが行なった航海はアメリカへの航海ではなかったし、そのようなものではありえなかった。というのは、過去を解釈する場合、遡及して解釈してはならないからである。

#### V. 「もう一つの世界」対「新世界」

実際、コロンブスが航海に挑戦していたころ、地球上には一つのとてつもなく大きな「地球の島」が存在し、その先の方は別れて三つの大陸になっていると信じられていた。それらがヨーロッパ大陸、アジア大陸、アフリカ大陸であった。分れてはいても、元はひとつに常がっているとされていた事実は、大陸(Continent)という言葉の語源が、繋がる(Continue)からきていることに表われている。

さて、前述したようにコロンブスは計四回の航海を成し遂げているが、第一回と第二回との航海で到着した地域はアジア大陸から延びている半島(黄金半島)ととらえていた。しかし、第三回航海では、それまでとちがって「もう一つの世界」があるのかもしれない、と報告書に記している。その土地をアジア大陸から延びている別の第二の大きな半島ととらえるのか、あるいは「地上の楽園」を含んだ「もう一つの世界」が存在する应考虑すべきなのか、それを見極めるための航海をしなければならないとコロンブスは考えた。いずれにせよ、彼にとって「地球の島」という観念はそのままに保たれたのであった。つまり、コロンブスは「地球の島」を構成する三つの大陸という中世的概念を覆すことは思い付かず、それに加えて、もし、もう一つの「南の大陸」が存在するなら、それを証明するためには、彼が到着したと思い込んでいる「アジア大陸」の半島のひとつであるインドと、その「南の大陸」との間に存在するはずの海峡を探さなければならない。これこそ彼の第四回目の航海の目的であり、そのためにメキシコ湾の西側を、現在のニカラグアなど中央アメリカを辿って海峡を探察しようとしたのである。結果は、当然ながら、予想された海峡

は存在せず、コロンブスは徒勞の航海を深い落胆をもって終えている。そして、やむを得ず、自分の探察した地域をアジア大陸から延びている第二の半島にちがいないと理解したのである。結論的にいえば、彼は現在の南北アメリカ大陸が「地球の島」とは別個に存在していることを発想できなかった。あくまで中世以来の三大陸説に固執し、それを否定することが出来なかった。もう一つの大陸を想定したとしても、それに「地上の樂園」という創世記から与えられたレッテルを貼って、いわば別枠を設けることで、従来の概念に固執したのである。

この強固な宗教的思い込みにとらわれたコロンブスの第三回目の航海と比較すると、際立った対照をなすのが、1503年ポルトガルからやはり西に向けて出帆したアメリゴ・ヴェスプッチの航海である。彼も、インドへの航路を求めて航海に出発したが、現在の南アメリカ大陸に遭遇すると大西洋沿岸を辿って南下し、はるか南緯50度まで下っていったのである。その陸地が南極に向ってさらに延びているのを見た彼は、これほどの大きな陸地を、もはやアジア大陸の半島ととらえることは出来なかった。彼は、当惑したが、従来信じられてきた三つの大陸以外に、別の大陸が存在していることを受け入れざるをえないと感じ、それに「新世界」という名前を与えたのだ。つまり、彼は新しい現実に遭遇したとき、それにあらたな名前を付けることで(D)したのである。オゴルマンはこの事情を次のように述べている。

新しい陸地の独立性は完全に承認された。「地球の島」とは分離された異質な実体としてみなされるようになった。さらに、その実体には特定の存在が帰せられ、他の類似した実体から区別されるために、適当な名称が付与された。〈中略〉その名称とはアメリカであった。そして、アメリカはしだいに可視的となり、とうとう最後に、こうして発明されたのである。

以上を別の言い方で表現すれば、コロンブスの最後の航海によって、三つの大陸からなると考えられていた「地球の島」の他にもう一つ別の大陸の存在する可能性が示唆され、ヴェスプッチがそれを明確に別個の大陸であると「区切りをいれ」て「新世界」と名づけ、さらに、そのことを着想した彼の名前、アメリゴ・ヴェスプッチにちなんで「アメリカ」というレッテルが貼り付けられたのである。オゴルマンは結論的に次のように述べている。「アメリカは、われわれが実証したと信じるころでは、(E1)されたのではなく(E2)されたのであり、しかもその(E3)者のイメージにより(E4)された。」

さて、これまで論じてきた点はスカンジナビア人による「アメリカ大陸到着」と比較することによっても検証することができる。ヴァイキング族をはじめ、スカンジナビア半島からは、北アメリカ大陸にコロンブスより早い時期に到達していることが考古学的調査によって証明されている。ところが、到達はしていても、その意味が分からない場合、あるいは自分が新たな地平に到達しているのかわからない場合、その事物を区別するた

めの名前を与えることがない。たとえ、ヴァイキングのサーガにあるように、その地を「ヴィンランド」(葡萄の地)と呼んではいても、その土地を異化して名づける「発明」はおこななかったのだ。

一方、ハーヴァード大学の歴史学教授であったアメリカ人歴史家サミュエル・エリオット・モリソン(1887~1976)は、コロンブス学の第一人者とされている。彼の代表作『大海の提督』と題されたコロンブス論はコロンブス研究のひとつのピークと見なされている。海軍出身の彼は航海術にもすぐれ、実際に航海の経験をゆたかに持ち、コロンブスの航路をみずから追体験しながらこの大著を著わした。そのなかでコロンブスが最終的に目指していたのはジパング(日本)であったことを明確にしている。マルコ・ポーロがかの『東方見聞録』のなかで描いていた幻の黄金の国ジパングこそ、コロンブスがインド近辺にその存在を確信していた憧れの島であった。ちなみにモリソンの著作には、日本の鎖国政策を転換させたペリー提督の伝記も含まれている。アメリカ海軍初の蒸気船で日本への大航海を成し遂げたペリーはコロンブスの果たせなかった夢を実現したとすることができるだろう。そのモリソンは1492年のコロンブスの最初の航海の叙述をしめくくるにあたって、次のように結論づけている。その部分を原文で引用してみよう。

Never again may mortal men hope to recapture the amazement, the wonder, the delight of those October days in 1492 when the New World gracefully yielded her virginity to the conquering Castilians.

オゴルマンは、この表現をとりあげ、いみじくも「形而上学的強姦」と名づけているが、この結論は実際の歴史的事実の理解というより、後世のアメリカ人歴史家モリソンの個人的解釈が溯って投射されている、と見ることができる。端的に述べれば、モリソンの意識のなかに意識されないままに潜んでいるアメリカ的意味付けが、コロンブスのアメリカ発見という発想のなかに遡及され埋め込まれていると言えよう。

## VI. 人間という存在

ここまで、人間の為す名づけという行為を、名前と名づけるものとの関係においてとらえようと試みた。その関係を満たしている恣意性には、これまで論じたように、さまざまな要素がからみあっている。しかし、それらの名づけという過程からは次のようなことが見えてきたのではないだろうか。すなわち、まず、「名は体をあらわす」とは言えないこと。にもかかわらず、人間とは、名づけないではいられない存在である。ということは、意味を求めずにはいられない存在でもあり、そして究極的には、そういうかたちで「体」に執着せずにはいられない存在である、という事実である。これを、ナルシスを思い出しながら、人間は憧れずにはいられない存在、さらに言えば、恋せずにはいられない存在とも言い

換えることができる。だからこそ、人は名前を付け、ある思い込みをもって、名づけられるものを固定化しようとする。しかし、その思い込みのために「名は体をあらわす」のではなく、「名は、体を名づけた者をあらわす」ということが言えよう。こうして、名づけることで、自分の思いを固定しようとするのが人間だが、人間の生は有限であるため、固定化したつもりの人間はやがて存在を失い、皮肉にも実体の無い名前だけが残っていく。最後にウンベルト・エーコの小説『薔薇の名前』がその結語としているラテン語の詩からの引用を紹介しておこう。

stat rosa pristina nomine, nomina nuda tenemus.

英訳：Yesterday's rose endures in its name, we hold (F) names.

#### 参考文献

丸山圭三郎『文化記号学の可能性』夏目書房 1993 .

エドモンド・オゴルマン『アメリカは発明された』青木房夫訳 日本経済評論 1999 .

ハーマン・メルヴィル『白鯨』田中西二郎訳 新潮文庫 1952 .

サミュエル・モリソン『大航海者コロンブス』荒このみ訳 筑摩書房 1992 .

Adele L. Haft, et al., *The Key to "The Name of the Rose,"* The University of Michigan Press. 1999.

William Shakespeare, *Romeo and Juliet*, The Arden Shakespeare, 1980.

---

次の問題(1 - 40)には、それぞれ a , b , c , d の答えが与えてあります。各問題につき、a , b , c , d のなかから、最も適当と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a , b , c , d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

---

- 1 ジュリエットがバルコニーで呟いていた理由としてあてはまらないのはどれか。
  - a. 自分の恋人の名前がロミオであることを知ったため。
  - b. 名前の恣意性によって自分が翻弄されることがうけいれがたいため。
  - c. ロミオがモンタギュー家の人間であることを知ったため。
  - d. ロミオに別の恋人がいることを知ったため。
  
2. この資料の本文 2 ページには、メルロ・ポンティが、「事物の命名は認識のあとになってもたらされるのではなくて、それは (A) そのものである」と言っている、という文がある。本論の文脈から考えて、(A) を埋めるのもっともふさわしいものは次のどれか。
  - a. 直感
  - b. 認識
  - c. 推測
  - d. 解釈
  
3. 日本に来たヨーロッパ人が日本語の「肩凝り」という言葉をはじめて知り、知ったと同時に自分の肩凝りを感じはじめた、という。本文の論旨と照らし合わせて正しい文章を一つ選べ。
  - a. ヨーロッパ人には肩凝りという現象がない。
  - b. 日本人には肩凝りが多い。
  - c. 肩凝りにあたる言葉がないと肩凝りが感じられない。
  - d. 日本には肩凝りを生じさせる状況がある。
  
4. この資料の本文 8 ページには、「(B) 発想の冒険者コロンブスは...」という一文がある。(B) に当てはめるのもっともふさわしいのは次のどれか。
  - a. 当然ながら
  - b. 皮肉にも
  - c. 困惑したが
  - d. 驚くべきことに

5. この資料の本文 8 ページには、「アメリカという概念が、時代を (C) してコロンブスの行為に投射されたからである」という文がある。本論の文脈から考えて、(C) を埋めるのもっともふさわしいものは次のどれか。
- a. 超越
  - b. 錯誤
  - c. 分断
  - d. 遡及
6. 第三回目の航海においてコロンブスが「地上の楽園」を発見したと確信した点について、もっともふさわしいのは次のどれか。
- a. 彼のキリスト教信仰の表れである。
  - b. 彼の発想の冒険者としての資質の表れである。
  - c. 固定観念に固執する彼の性質の表れである。
  - d. 彼の置かれた状況から判断して当然の判断である。
7. アダムの名づけの言葉と幼児の言葉とは、どのような関係があるだろうか。
- a. 両方とも経験的知識に裏付けられている。
  - b. アダムの場合は経験的知識に裏付けられているが、幼児には経験的知識がない。
  - c. 幼児の場合は経験的知識が作用するが、アダムには経験的知識がない。
  - d. アダムと幼児の言語を比較することは出来ない。
8. 丸山の名づけにおける一次のおよび二次的作用について、あてはまらないものはどれか。
- a. 神の創造の言語は一次的な作用をもっている。
  - b. ヴェスプッチが「新世界」と名づけたのは、一次的作用である。
  - c. コロンブスが「サン＝サルヴァドル」という地名を付けたのは、一次的作用である。
  - d. アダムの名づけの言語は二次的な作用をもっている。
9. この資料での中心的概念である「発明」という言葉にふさわしい英語は次のどれか。
- a. Invention
  - b. Imagination
  - c. Discovery
  - d. Realization

10. アメリカ原住民がインディアンと呼ばれるようになったのはなぜか。
- a. アジア人の血統を受け継いでいると考えられたから。
  - b. ベーリング海を渡ってアメリカ大陸に来ていたと考えられたから。
  - c. アジアの言語を使っていると考えられたから。
  - d. 住んでいる土地がインドだと考えられたから。
11. コロンブスのたまごの逸話がこの本文中で使われている意図は次のどれか。
- a. 新たな発想と実行こそがコロンブスの神髄であることを示すため。
  - b. コロンブスは新たな発想の冒険ができなかったことを示すため。
  - c. コロンブス自身の特質を物語る象徴的なエピソードであることを示すため。
  - d. コロンブスの偉業の意味が広く理解されていることを示すため。
12. モリソンのコロンブス論に関して、もっともふさわしい表現は次のどれか。
- a. モリソンのコロンブス論では、アメリカを「創出」したとすることができる。
  - b. モリソンのコロンブス論では、アメリカを「発明」したとすることができる。
  - c. モリソンはアメリカの意義を「抽出」したとすることができる。
  - d. モリソンはアメリカの意味を「投射」したとすることができる。
13. この資料の本文 9 ページには、ヴェスプッチについて「彼は新しい現実に遭遇したとき、それにあらたな名前を付けることで (D) したのである。」という文がある。文脈から考えて (D) にあてはまる語句は次のどれか。
- a. 異化
  - b. 解釈
  - c. 分析
  - d. 記号化
14. 本論の主旨から考えて、次の文章のうち正しいものはどれか。
- a. コロンブスはインドを「発見」したといえる。
  - b. コロンブスはアジア大陸を「発明」したといえる。
  - c. コロンブスは「地上の楽園」を「発明」したといえる。
  - d. ヴェスプッチは新大陸を「発見」したといえる。

15. アダムの名づけの言葉と神の創造の言葉に関してふさわしくないのはつぎのどれか。
- a. アダムの言葉は現実を差異化している。
  - b. 創世記における神の創造の言葉は差異化も含んでいる。
  - c. 神の「光りあれ」という言葉は「マグマのごとき」新しい実体の創出である。
  - d. アダムの言葉は物にレッテルを貼る作業である。
16. この資料から考えて、真の意味で発想の冒険者と言えるのは次のうちどれか。
- a. コロンブス
  - b. モリソン
  - c. ヴェスプッチ
  - d. マルコ・ポーロ
17. アメリカ合衆国がコロンブスに特別な思いを持つことについて、本文の論旨にもっともふさわしいのは次のうちどれか。
- a. 歴史的事実から考えて妥当なことである。
  - b. 歴史的事実に基づいた神話形成が成されているからである。
  - c. アメリカ合衆国における恣意的な神話形成の結果である。
  - d. アメリカ合衆国の建国神話として説得力がある。
18. ジュリエットの台詞のうち、“That which we call a rose / By any other word would smell as sweet.”にもっとも近い日本語訳はどれか。
- a. だれか別の人に薔薇と呼ばれたものは同じように甘く薫るだろう。
  - b. 別のどんな言葉で呼ぼうとも、薔薇は同じように甘く薫る。
  - c. 薔薇という言葉で呼んだものは同じように甘く薫る。
  - d. 薔薇と呼んでいるものは、別の言葉で呼ぼうとも、同じに甘く薫るはずだ。
19. コロンブスの第一回目の航海に関するモリソンの結論について、次のうちもっとも正しいものはどれか。
- a. モリソンは自分の解釈の主観性を自覚している。
  - b. モリソンはその後の歴史的展開の起源をそこに見ている。
  - c. モリソンはあの時点が秘めていた歴史的意味合いを言い当てている。
  - d. モリソンは彼の時代の歴史的状況のもとで過去を解釈している。

20. ナルシスの神話が『モウビー・ディック』にとって重要な理由は次のどれか。
- a. モウビー・ディックの白さの意味を考える助けとなるから。
  - b. イシュマエルのナルシスト的性格を解きあかしてくれるから。
  - c. この小説の持つギリシャ的背景を示唆しているから。
  - d. エイハブ船長の白鯨のとらえかたを理解する助けとなるから。
21. イシュマエルにとってモウビー・ディックの白さが示している意味は次のどれか。
- a. 白鯨に内在する象徴的意味合いを表わしている。
  - b. 鏡のような働きをしている。
  - c. 白鯨のもつ純粋性の象徴である。
  - d. 白は本来の色ではなく光線が投げかけた色である。
22. 『モウビー・ディック』という小説についてあてはまるのは次のどれか。
- a. アメリカ合衆国の捕鯨産業を擁護しようとした小説である。
  - b. 日本の鎖国政策廃止に少なからぬ影響を与えた小説である。
  - c. アメリカ合衆国の捕鯨禁止運動の発端となった小説である。
  - d. アメリカ合衆国の捕鯨を扱いつつ意味論も展開する小説である。
23. ジュリエットの薔薇と、エーコの薔薇について次のうちあてはまるのはどれか。
- a. エーコの『薔薇の名前』はジュリエットの台詞からとられている。
  - b. ジュリエットの薔薇は虚ろいやすさの、エーコの薔薇は、永遠性の象徴である。
  - c. 薔薇の名前について、ジュリエットは実体を、エーコは名前を重視している。
  - d. 両者にとって、薔薇は永遠の愛の象徴である。
24. 虹の色は何色か、という問いに対して、人種によって七色であるとか、三色であると答えるという。本文の論旨と照らし合わせて正しい文章を一つ選べ。
- a. 連続して変化しているはずの虹の色を分けて言うのは言語の限界を示している。
  - b. 虹の色に何色を見るかは、色の名前のあるなしが決定している。
  - c. 人種によって色彩感覚に違いがある。
  - d. 虹の七色以外にも赤外線や紫外線を数えることも人種によっては可能性である。

25. 以下の四者のおこなった航海のうち三者はある共通した要素を持っていた。その共通項を持たない一人はどれか。
- a. ヴェスプッチ
  - b. ペリー
  - c. マルコ・ポーロ
  - d. コロンブス
26. 本論の 10 ページに引用されている英文箇所の中で用いられている “gracefully” の意味としてもっともふさわしいものは次のどれか。
- a. 感謝をもって
  - b. 謙虚に
  - c. 嫌々ながら
  - d. 優雅に
27. オゴルマンはモリソンの下した結論（英文の引用箇所）を「形而上学的強姦」と呼んでいるが、その根拠としてふさわしくないものはどれか
- a. 新世界が感謝をもって征服者を迎えている。
  - b. 新世界を女性として概念化している。
  - c. 新世界を征服されるものとして描いている。
  - d. 新世界がみずからを差し出している存在として描いている。
28. 金魂をみつけはしたが、その人が「金」という語を知らない場合、本文の主旨と照らし合わせてもっとも類似した状況は次のどれか。
- a. 白い鯨の白の意味がつかめない場合と同様である。
  - b. 薔薇とは知らずに、その薫りを楽しむ場合と同様である。
  - c. スカンジナビア人が北アメリカ大陸に到達していた事情と同様である。
  - d. コロンブスが到着した土地をインドと思い込んでいたのと同様である。
29. コロンブスは第一回の航海で、到着した地点をサン＝サルヴァドールと名づけたが、この地名について正しいのはどれか。
- a. この地名はキリストを意味している。
  - b. 長い航海の末、命が救われたことを意味している。
  - c. その地を救済しようとする意図が加味されている。
  - d. 自分が救世主であるという意識が含まれている。

30. エイハブ船長とナルシスについて、次のうち正しいものはどれか。
- a. 語り手イシュマエルは、両者のあいだに、預言と実現の関係をみている。
  - b. エイハブ船長は白鯨にとらわれ、ナルシスは水仙にとらわれた、という共通した要素がある。
  - c. エイハブ船長は憎悪を、ナルシスは愛情をそれぞれの村象にたいして抱いた、対照的な事例である。
  - d. エイハブ船長もナルシスも自分の反射した姿にとらわれ、破滅したと考えられる。
31. 本資料にある「もう一つの世界」と「新世界」とは、どのような関係にあるのだろうか。正しくないものを一つ選べ。
- a. コロンブスは「もう一つの世界」に「地上の楽園」があると信じ込んだ。
  - b. ヴェスプッチは三大陸説の外に「新世界」を位置付けた。
  - c. 「もう一つの世界」と「新世界」とは、同じものの別の表現である。
  - d. 「もう一つの世界」とは、「新世界」とは異なったものの表現である。
32. 『モウビー・ディック』のナレーター、イシュマエルが白鯨の白い色に恐怖感を抱いている理由は次のどれか。
- a. 白鯨の悪意が表われているから。
  - b. エイハブ船長の憎悪が表われているから。
  - c. 名づけがたい性質をもっていると考えられるから。
  - d. 白という色が、恐怖の象徴であるから。
33. オゴルマンによる「発見」という言葉の用法と類似している「発見」は次のどれか。
- a. その存在が理論的に推定されていた惑星が発見された。
  - b. 洞窟の奥に壁画が描かれているのが迷い込んだ羊飼いにによって発見された。
  - c. 熱帯雨林に生息するサルから新種の病原菌が発見された。
  - d. 一枚の写真が図書館の蔵書に挟まれた状態で発見された。
34. 以下の名づけのうち、丸山のいう一次的作用を意味しているものは次のどれか。
- a. アメリゴ・ヴェスプッチが「新世界」と名づけた。
  - b. アメリゴ・ヴェスプッチにちなんで「アメリカ」と名づけた。
  - c. コロンブスが「地上の楽園」と名づけた。
  - d. コロンブスが「インディオ」と名づけた。

35. 次の名づけのうち、丸山のいう二次的作用を意味しているものは次のどれか。
- a. ヒラメと区別してカレイと呼ぶ。
  - b. ビールの一部を発泡酒と名づける。
  - c. 鉄道の一部を新幹線と名づける。
  - d. 帆船を歓喜号と名づける
36. この資料の最後で「名は、体を名づけた者をあらわす」と言われているが、その理由としてふさわしいものはどれか。
- a. 体が名を付けた者の本質をあらわすから。
  - b. 名前が名を付けた者を反射するから。
  - c. 名前と体との関係は恣意的であるから。
  - d. 名を付けた者の本質が名前にあらわれるから。
37. 本文 9 頁にあるオゴルマンの結論は、「アメリカは、われわれが実証したと信じるころでは、(E1)されたのではなく(E2)されたのであり、しかもその(E3)者のイメージにより(E4)された」であるが、この E1 から E4 までの 4 つの空欄を埋めるのに適切な語句の組み合わせは次のどれか。
- a. 発明 発見 発明 発見
  - b. 発見 発明 発明 発明
  - c. 発見 征服 征服 征服
  - d. 征服 所有 征服 支配
38. 「名は、体を名づけた者をあらわす」例としてあげられるのはどれか。
- a. アダムによる被造物の命名
  - b. ヴェスプッチによる「新世界」という概念
  - c. モリソンによるアメリカ発見という見解
  - d. コロンブスによるインディオという命名
39. この資料の最後には小説『薔薇の名前』からラテン語の結語が引用されている。その英訳の空欄(F)を埋めるのにふさわしい言葉は次のどれか。
- a. empty
  - b. memorial
  - c. actual
  - d. dreamy

40 . この文章全体のタイトルとして、ふさわしいものは次のどれか。

- a . 発見と発明
- b . 名前と名づけ
- c . 薔薇の名前
- d . 名前の発明